



2025 年 6 月 30 日

中華民国におけるソ連の対外諜報活動—1940 年代

研究員

河西 陽平

問題意識

本稿の目的は、1940 年代のスターリン政権下のソヴィエト連邦（以下、ソ連）の中華民国における諜報活動の実態を明らかにすることである。1931 年 9 月 18 日の満洲事変の勃発以来、極東における日本の軍事的脅威はソ連にとって無視できるものではなく、中国大陸への日本の進出が重大な懸念事項となったのである。

ロシアでは、プーチン政権下の現在に至るもなお「田中上奏文」と呼ばれる、現在では偽書であることが明らかになった文書に基づいて日本は対中、対ソ侵略政策を行ったと説明されている¹。すなわち、1928 年の張作霖爆殺事件に始まり、1931 年の満洲事変、1937 年の盧溝橋事件とそれに端を発する日中全面戦争、1938 年の張鼓峰事件、1939 年のノモンハン事件、そして 1941 年 6 月 22 日の独ソ開戦に際して日本の陸軍参謀本部作戦課が主導となって発動した史上空前の対ソ動員である「関東軍特種演習」は、「田中上奏文」という壮大な大陸侵略計画に従って実施されたという考え方である。

日本が「田中上奏文」に従って中国やソ連に対する侵略を行ったという歴史認識が誤りであることは、少なくとも我が国の歴史研究においては常識となっはいるが、満洲事変後、関東軍の規模を増強させつつあった日本が当時のソ連にとって大きな脅威となったことは事実である。

事実、1931 年 8 月当時、バイカル湖からウラジオストクに至る地域に駐屯するソ連軍の戦力はわずかに歩兵師団 6 個、騎兵師団 2 個であり、沿海地方の防衛の準備もなされていなかった。そのためソ連人民委員会議付属国防委員会は、1932 年 1 月 13 日の決定によって、極東戦備の開始を本格的に開始することになったのである²。その後 1933 年 1 月にドイツでヒトラーが政権を獲得、1936 年に日独防共協定を締結して日本との関係を深化させたことによって、ソ連はファシスト・ドイツと軍国主義日本によって東西から自国の安全を脅かされる事態に陥った。

このように、スターリンを首班とするソ連の指導者層にとって最大の課題は、いかにしてドイツと日本の両方を敵に回した二正面戦争という災厄から逃れることであつた。ところが、スターリンはこれら二国の仮想敵の対ソ動向を知るために各国に張り巡らせていたはずの諜報員たちのほとんど全てを、1937 年から 38 年にかけて国内に吹き荒れた「大粛清」で一掃してしまったため、新たな諜報網を作り直さなければならなかつたのである。特に日本の対ソ動向を知る上で重要な拠点は東京であり、また中国であつた。東京での諜報活動に関しては、リヒャルト・ゾルゲと彼の組織した諜報団の活躍が広く知られている³が、本稿では蔣介石を首班とする中華民国にソ連大使とし

て赴任したアレクサンドル・パニューシキン、また後にスターリングラードをめぐる攻防戦で名を馳せることになるが、国民革命軍の軍事顧問として中華民国に駐在経験のあるヴァシリー・チュイコフ、そして、かつてナチス突撃隊の指導者だったが、ヒトラーと袂を分かち中華民国に亡命、蒋介石の軍事顧問をしながら対ソ情報協力者となったヴァルター・シュテンネスについて、彼らが国民政府関係者との外交活動、諜報活動を通じて、彼らが日ソ戦を回避するために奔走する模様を一次史料や回顧録から説き起こしたい。

1. 駐中国ソ連大使パニューシキンの活動

1939年7月30日にアレクサンドル・パニューシキン⁴は中国駐在ソ連大使として重慶に赴任した。彼は当初、国民政府との経済協定の合意を行うための人民委員として中国にやって来たが、同月に中国駐在の特命全権大使に任命され、更に中国における内務人民委員部（NKVD）の諜報活動の責任者となった。ロシア対外情報庁（SVR）が刊行した公式資料集である『ロシア対外諜報史概説』によれば、彼の足跡は以下の通りである。

パニューシキンが役職を兼任した当時、蒋介石の国民革命軍は中国大陆で日本と交戦していたが、日本の侵略に対して首尾よく戦うためには、国民党と共産党が一致団結しなければならないという状況にあった。

ソ連にとっては、日本がソ連に対して参戦するかどうか見極めることが重要であったため、諜報活動に課せられた任務は、日本の軍人の中国、モンゴル、そしてソ連に対する対策を常時注視し続けることにあった。更にパニューシキンに課せられたのは、蒋介石の国民政府を説得し、中国共産党との内戦を即時停止して、抗日戦に注力させるようにするという難題であった⁵。

満洲国と国境を接する部隊での勤務経験の長かったパニューシキンは、自分の部下の若い諜報員たちに対して、諜報に関心を有する外国の情報提供者たちとの間に信頼関係を醸成する方法を教えるのに大きな力を注いだ。

ソ連の対外諜報活動拠点では、日中間の軍事行動の経過と、中国政府の上層部に存在する様々な集団がこの戦争にどのような関係をもっているかということに関心を抱き、注視を続けていたのであった。実際、南京国民政府の汪兆銘に代表される親日勢力は、いかなる条件でも日本と和平を結ぶことに賛成していた。一方で蒋介石率いる国民政府は、一切の講和を認めず、徹底抗戦を主張するも、中国共産党軍との戦闘も同時に継続していた。ソ連としては、国共両党が一致団結して対日戦に注力することを望んでいたため、パニューシキンは国民政府の代表者たちと会談するときには常にこう主張するのであった。すなわち、ソ連が中国に兵器を提供するのは日本の侵略者と戦うためであって、内戦を勃発させるためではない、日本と戦わないのであれば、ソ連は中国への支援を停止しなければならないということである。

パニューシキンは馮玉祥や孫科、賀耀組といった著名な人物だけでなく、郭沫若などの共産党側の要人とも接触し、博古や葉剣英との会談を通じて、現在の中国の内情をより詳細に知ることができ、モスクワに情報を送った。1941年に国共関係は再び悪化するが、パニューシキンに率いられた重慶の諜報拠点は抗日統一戦線の呼びかけに努力し、何とか国共両軍の全面衝突という最悪の事態を回避することができたのである⁶。

それではパニューシキンと国民政府・共産党関係者の間ではどのようなやりとりがされたのであ

ろうか。1940年2月29日にパニューシキン(潘尼)は孔祥熙・行政院長、何応欽・軍政部長、邵力子・中ソ文化協会副会長らと会談を行っている。パニューシキンによると、最近中国の新聞ではソ連がフィンランドとの戦争で衰退したことを引き合いに出して、ソ連の対中関係について悲観的な論調の文章が見られており、ソ連は中国を犠牲にして日本との関係を良くするのではないかと考えている者もいるとの見解に触れ、そのような意見は全く正しくないと強く否定しており、ソ連の中国援助に関する悲観論や疑念といったものを述べることに何の根拠もないと日記に記している⁷。

同年7月22日にパニューシキンは白崇禧・国民革命軍参謀次長と会談を行っている。白崇禧は日本軍の宜昌作戦(同年5～6月)によって宜昌が陥落し、国民革命軍が苦しい戦況に立たされていること、蒋介石が日本との徹底抗戦を決意しているものの、対外政策方針に関する会議では諸外国からの軍事支援は見込めず、最早支援を行ってくれるのはソ連だけであり、今後もソ連からの大規模な軍事支援が必要となるとの見解に達したことを伝えた。パニューシキンが国共内戦の問題についても尋ねたところ、現時点では国共両党の問題は解決されているという白崇禧の返答に満足したようであり、今後も中国を軍事的に援助する意思を示した⁸。

同年10月31日にパニューシキンは再度白崇禧と会談を行ったが、7月22日と同様国民党と共産党の協力について質問した。白崇禧によれば、中国人民は、日本の侵略者との民族解放戦争で勝利するために、孫文の「三民主義」の旗の元に一致団結し、全中国人民の一つの目的は敵を追い払い、独立と自由を獲得することであり、この点は中国共産党が提起する課題と何ら違うものはないとのことであった。

ただし白崇禧は、国民革命軍第18軍集団の軍事行動区域ではない山東省、江蘇省において国共両軍の間に発生した衝突については、これを容認することができないと述べた。白崇禧は過去に共産主義者たちのことを認め、許してきたが、今回ばかりは彼らを擁護することができず、自分には、共産主義者たちが誤りを犯しており、全く正しくない、良からぬことを行っているのがはっきりと分かると発言した。

その上で彼は次のように続けた。すなわち、国民政府は周恩来と共同して、国民革命軍第18軍集団および新四軍の軍事行動区域、武器の供給などといった点に関する施策を立案し、これらは共産党と国民党の両方によって認可されたが、これまでのところ第18軍集団も新四軍もこうした施策を遂行しようとは考えておらず、これらの軍隊は日本軍と戦い、国民党と協力する代わりに、国民政府の軍隊と戦っている、彼らは中央政府の命令に服従せず、日本軍との戦闘を停止し、友軍(国民政府の軍隊―筆者)に攻撃の対象を変えている、とのことであった⁹。

パニューシキンは、白崇禧自身、共産主義者たちは自身の敵だと考えているかどうか尋ねた。白崇禧は、国民政府は彼らを敵とは考えていないが、彼ら自身が国民政府の敵になろうとしていると返答した。パニューシキンは、共産主義者たちはこれまで日本人との戦いを止めたことがないのだから、彼らを敵と呼ぶのは正しくないと述べ、あくまで国共の協力を斡旋するのだった。

白崇禧は国共の協力は続けられるべきだが、そのためには周恩来と共同で立案し、中央政府に認可された施策を受け入れ、これを遂行することが不可欠であると述べた。白崇禧によると中央政府は、もし中国共産党が自分たちの軍隊(国民革命軍―筆者)との戦いを続けるのであれば、共産主義者たちは抗日戦争を支持していないということを全世界に向かって呼びかける必要がある、という点で意見がまとまっているとのことであった。パニューシキンは、抗日戦争における中国の最終的な勝利は中国にある全ての党の協力にかかっており、国民党と共産党の合作の重要性については

これを忘れ、過小評価することがあってはならないと釘を刺した¹⁰。

これらの会談記録を読むと、パニューシキンが、国共両党が結束して抗日戦を継続することを何よりも重視し、そのための軍事支援は惜しまないという姿勢を一貫していることが分かる。実際パニューシキンは本国のソロモン・ロゾフスキー外務人民委員代理とのやりとりのなかで、中国に対する更なる軍事支援を要請し、承認されている。この点を蔣介石に伝達したところ、彼がスターリンとモロトフに対して感謝の気持ちを抱いていたこともロシア側の史料から明らかである¹¹。

さて、1940年12月18日にドイツのヒトラーは対ソ戦計画「バルバロッサ」命令を発しており、ソ連との国境付近にドイツ軍が集結しつつあることが、ソ連を含め各国の諜報員たちによって確認され始めていた。

1941年4月10日にパニューシキンは国民政府財政部長の孔祥熙と欧州情勢の推移について会談を行っている。孔祥熙の分析は以下のようなものであった。すなわち、もしドイツが二、三ヶ月の間にバルカン諸国を占領することができるなら、英国の敗北主義者たちがドイツとの和平を要求することになる、もしドイツが自ら幾つかの譲歩をした場合には和平は結ばれることになるが、もしドイツがこの期間に戦争を終わらせることができなければ、現在の戦争がより長期的なものになることは避けられないであろう、というものである。

ドイツの対ソ態度について聞かれたパニューシキンは、今のところドイツがソ連との関係を悪化させようとしていると言えるような根拠はないと返答した。これに対して孔祥熙はドイツから得た情報を元に、ドイツの世論は明らかにソ連に反対するように醸成されており、ソ連との戦争を宣言している者もいること、ドイツのソ連に対する敵対的な感情が日増しに増大していることを指摘した。

パニューシキンは、具体的な国名は挙げなかったが、自国の国力と可能性を過大評価し、他国の国力を過小評価する「国々」もあるかもしれないと答えた。この時パニューシキンの念頭にはどの国が浮かんでいたのであろうか。

パニューシキンの発言は、不可侵条約を破棄してまでドイツがソ連との戦争に突入するなど考えられないとして、中国側の懸念を打ち消すためのものだったのであろうか。あるいは、孔祥熙の警告に不安を感じたものの、事態はまだ風雲急を告げる段階にはないとして、彼の指摘を受け流したのであろうか。また注目すべきは、ここでパニューシキンが「国々」と述べている点である。この時彼はドイツだけでなく、日本を考慮に入れて発言したと考えられる。

それというのは、パニューシキンの発言の直後に孔祥熙が松岡洋右外相のソ連滞在について話題を切り出しているからである。パニューシキンは、松岡外相とソ連指導部との間にどのような会談が行われているかは知らなかった。孔祥熙は日本の反共政策について述べ、ソ連側に警戒を呼びかけている。すなわち、ここ最近のドイツと日本の歴史を見ると、この両国がソ連を撃滅しようとしていること、いかなる条件においてもこの二国がソ連の撃滅を取りやめようとはしないということ、そして日本が中国を枢軸国の反共政策に関する合意に引きつけようとしていること、そして松岡洋右はソ連側に取り入るような言葉によって同国を欺き、日本との間に不可侵条約を締結しようとしているということである。

孔祥熙は、日ソ間に不可侵条約が締結されるという事実を前にして、中国は大変に不愉快に感じていると率直に述べた。また孔は、日本は規模約30万の軍隊を満洲から中国大陆へ送り出してお

り、中国人民は解放戦中にソ連から与えられた援助に感謝をしているが、ソ連政府のこのようなやり方をひどく感じてもある、もし日本が中国を鎮圧することに成功したら、次の標的がソ連に向かうのは明らかである、と警告した。パニューシキンはこれに対して、ソ連はかつて他国とその人民を犠牲にして平穏を得たことはなく、むしろ弱体で圧迫された国家を常に助けてきたと返答した。その上で、今後も中国を支援するソ連の方針に代わりがないとの立場を明言するのであった¹²。

日本とソ連の間に中立条約が締結されたことについて最も衝撃を受けたのは蒋介石であり、4月19日に行われたパニューシキンとの会談で不満を表明している。蒋介石によれば、同月15、16日付で発刊された『大公報』に掲載された日ソ中立条約に関する社説には、中国の知識人たちは20年もの間ソ連を誤解してきた、知識人たちは自らがスターリンに寄せていた感情に失望したという記述がなされていたという。その上で蒋介石は、今後ソ連が、中国が関係することになる何らかの対日政策をとるのであれば、たとえ内密なやり方であったとしても中国に伝えてほしい、何故なら中国は対外政策においては何よりもソ連の対外政策の方針に従ってきたからであると述べた¹³。

日ソ中立条約によって抗日戦の負担が増したことに蒋介石をはじめ、国民政府側が強い失望を感じたのは当然のことであった。彼らの強い抗議を受けて、中国への支援を続けるという立場に変わりはないという返答しかパニューシキンには出来なかった。

その頃彼らの元には、ドイツの対ソ参戦可能性に関する情報が頻繁に入り始めていた。中国駐在の大使であると同時に中国におけるソ連の対外諜報機関の元締めであるパニューシキンに新たに降りかかった課題は、ドイツの対ソ侵攻に関する正確な情報を得ることであった。

ヴァチスラフ・イワノヴィチ・トルブニコフの『ロシア対外諜報史概説』によれば、パニューシキンの率いる重慶の諜報活動拠点には、中国の内情や対外政策だけでなく、日本を含む他国に関する情報もモスクワに送ったという。たとえば同書には、独ソ開戦の半月前、重慶に駐在するドイツ軍武官情報として、ドイツ軍司令部の計画、特にドイツ軍の主な進軍方面に関する情報をモスクワに打電している¹⁴が、東京のゾルゲや諸外国の諜報員たちと同様、6月22日という正確な開戦日を明らかにすることはできなかったようである¹⁵。

独ソ開戦後、パニューシキン達にとって大きな懸念事項となったのが、ドイツの対ソ軍事行動に際して日本がどのような行動をとるかという点であった。満洲事変以来、極東におけるソ連の最大の軍事的脅威である日本の対ソ動向を把握することが彼らにとっての急務であった。

ところが、独ソ開戦後の日本の動きを正確に知ることは各国の諜報員たちと同じく、パニューシキンにとっても困難であった。特に問題を複雑化させたのは、日本の陸軍参謀本部作戦課が主導して行った対ソ大動員である「関東軍特種演習」の目的が独ソ戦況によって変化したことをソ連側が察知できなかったこと、ソ連が日本に対して開戦することによって抗日戦の負担を減らしたいと考えた国民政府側が日ソ戦の勃発を煽るような態度を示したことの二点であった。

まず「関東軍特種演習」は、その実施にあたって①「好機」に応じた対ソ武力行使、②劣勢にあった関東軍の対ソ戦備の増強、③南方進出時における後背の安全確保という三つの目的を有するものであり、閻雲にソ連に対して武力攻撃を仕掛けるためのものではなかったという点に留意する必要がある¹⁶。「好機」については、当時参謀本部は極東ソ連軍の師団が欧州方面に移送されることによって半減し、航空機と戦車が三分の一に減少した場合を一応の対ソ参戦の目安としていたが、そうした場合でも即時武力行使に踏み切るわけではなく、改めて国際情勢、独ソ戦局や米英ソその他諸国の対日動向、関東軍の戦備充足の程度などを慎重に検討したうえで改めて攻撃の成否が決めら

れるというものであった¹⁷。その「好機」もドイツ軍の進撃速度が鈍ったことに加え、参謀本部が予想したほど極東からソ連軍戦力が欧州方面に移送されなかったこと、関東軍の対ソ戦準備が整わなかったことといったことが原因で遠のき、「関東軍特種演習」は7月半ばの時点で対ソ武力準備から、関東軍の対ソ戦備の増強へと目的が変化していったのだが、ソ連側は諜報活動によってこのことを窺い知ることはできず、「関東軍特種演習」は一貫した日本の対ソ戦準備であるとの認識を持ち続けることになったのである。

その一方で、蒋介石を首班とする国民政府は、ソ連の対日参戦を希求するあまり、未確認な情報に基づく日本の対ソ参戦可能性をソ連側に報告する動きをとるようになっていく。

独ソ開戦翌日の6月23日にパニューシキン(パニョーシキン)は国民革命軍事委員会委員の馮玉祥(フンジュシヤウ)将軍と会談を行ったが、蒋介石が軍事委員会出席者に対して、今後一か月の間に日本がシベリアの極東ソ連軍に対して攻撃する準備を行っているとの情報を得たとしてソ連側に通告するよう述べた、と聞かされた¹⁸。

6月25日にパニューシキンは王寵惠(ワンチュウエイ)外交部長と今後の日本の対外政策について議論を行ったが、王は①南方へ拡大する、②北方へ拡大する、③独ソ戦に対して一時的に中立の立場をとり、中国に圧力を加えるという三つの可能性のうち、②すなわち日本の対ソ攻撃の可能性が最も高いと指摘した。パニューシキンは、日本が今すぐにソ連に対する攻撃を行うと言えるだけの根拠はないと述べると、王外交部長は、日本は自国の艦隊を危険に晒したくないために南方への進出を完全に取りやめ、北方進出に都合のよい時期が到来するのを待っているとの見解を示した¹⁹。

日本の対ソ参戦可能性については国民政府が発行する『中央日報』にも記されていたため、パニューシキンは6月27日の白崇禧(ハクチュシキ)将軍との会談で、中国国内で発行されている全ての新聞が日本は早晚ソ連を攻撃するとの見方を示しているのは何故か、白崇禧自身はこうした日本の意図について正しく理解しているのか、中国の新聞は日本の対ソ攻撃が行われることについて反駁し難い証拠でも持っているのかと厳しく問いただした。白崇禧は、日本は米英両国の軍事力と衝突することを考慮すると南進に踏み切ることとはできない、中国の問題(日中戦争一筆者)を解決できるような状態にもない、しばらくの間ソ連を攻撃することもできないと前置きしながらも、日本国内ではドイツの戦果が大々的に宣伝されており、対ソ攻撃を行う可能性が十分考えられるとの見方をした²⁰。

7月4日、パニューシキン大使は先回(6月27日)白崇禧に対して尋ねたと同様、馮玉祥に対して日本の対ソ参戦可能性について問うた。中国国内で発行されている新聞では日本の対ソ攻撃が開始されるだろうと書かれているが、それは信憑性のある資料に基づいて書かれたものなのかどうか、という点を追求しようとしているのである。

馮玉祥は、新聞の内容は日本の軍国主義者たちの経験とその心理に基づいて書かれたものであり、新聞の多くは日本がドイツ、イタリアと歩調を合わせた行動をとるだろうという結論に達していると述べた。

日本が対ソ攻撃を行う為に軍隊を集結させていることを示す資料でもあるのかと問われると、馮玉祥は直接的な回答を避け、日本の行動について以下二点の見方があると答えた。第一に、日本はソ連に宣戦する。第二に、日本は中国に圧力をかける。馮玉祥自身は第一の見方に賛成しており、対ソ攻撃を行う場合、日本はモンゴル人民共和国側から、ウランバートルを通じてヴェルフネウジンスク(現在のウラン・ウデ)に向かって攻撃を仕掛けるだろうとの推測を行った。その上で馮玉祥が提案したのは、日本による第一撃が加えられる前に中ソ間で軍事同盟を締結することであった。

何故これまでに国民政府は独ソ戦に対する自国の立場について公式声明を発表していないのかというパニューシキンの質問に対して馮は、ソ連の勝利は中国の勝利であり、ソ連の敗北は中国の敗北であるという蔣介石の言葉が中国政府の立場を表しているという直接的な回答を避けた。更に、現在中国は日本軍に対して反撃を行うことができず、辛うじて日本の攻撃を打ち返しているにすぎないという現況を述べた²¹。

7月15日にパニューシキンと会談した郭泰祺国民政府外交部長も馮玉祥と同様、好機を捉えて日本は必ず北方へ進出する、すなわちソ連への攻撃に踏み切るだろうとの確信を示した。郭外交部長は、日本が既に宜昌、山西省から大規模な兵団移動を行っており、板垣征四郎が朝鮮軍司令官に任命されたことも、日本が対ソ攻撃の準備を集中的に行っていることを示していると考えた²²。

日本の対ソ攻撃に関する信憑性のある情報を提示してくれない国民政府側に対し、パニューシキンの不満と焦りがつのっていたことがロシア側の一次史料から読み取ることができる。

10月17日にパニューシキンは郭泰祺外交部長と再度会談を行っている。郭外交部長の見解によれば、近衛文麿内閣の退陣は対ソ攻撃を行う日本の意図を示すものであり、今が北方攻撃に絶好の機会であるとのことであった。その上で彼は、中ソ両国の軍事協力に関する議論を促進する必要があると指摘した。

パニューシキンが郭外交部長に対して、日本の対ソ攻撃決定を指示した資料を出来れば共有してくれないかと頼んだところ、彼は資料を提示する代わりに次のように述べた。すなわち、日本の内外政策の最近の傾向から判断すれば、日本が対ソ攻撃を行う機会は南方に進出する機会よりも多いと言うことができる、日本の国内状況は、「その場に立ち止まっている」ことが最早出来ないほどになっている、日本は何らかの行動を決断するに違いない、日本が古来よりソ連に対する戦いを準備していること、現在日本の政治においては海軍軍人よりも陸軍軍人の方が重要な役割を果たしていることを考慮すると、日本は米国や英国がフィリピンやシンガポールにおける自国の地位を強化した南方よりも、北方に対して間もなく行動を開始すると結論することができる、とのことであった²³。

国民政府側が主張するような1941年内の日本の対ソ参戦は実現しなかった。日本は北方ではなく、ハワイの真珠湾を奇襲攻撃することによって対米英戦に突入したためである。独ソ開戦以来、日本の対ソ動向をめぐる情報は錯綜し、スターリンを首班とするモスクワの首脳部も東京や重慶を含む各国の諜報員たちも、日本の動きを警戒し続けていた。

1941年内の日本の対ソ動向をモスクワが判断するに際して決定的となったのが、日米開戦直前に東郷茂徳外相からベルリンの大島浩大使に送られた暗号電報の内容をNKVDが傍受、解読したことだと推察される。11月27日に東京からベルリンに送信された電報には「日本の軍事行動はさしあたり南方に主力が置かれ、ソ連に対して積極的に行動を起こすことは控えられる」という日本政府の決定が記されていたのである。この情報に接したことによって、少なくとも南方での軍事作戦を行っている間は日本が対ソ攻撃を開始することはないが、南方作戦終了後は対ソ攻撃を行う可能性が高いというインテリジェンスを導き出したのであった²⁴。

このような情勢認識を重慶のパニューシキンが共有していたかどうかは判然とせず、彼は相変わらず日ソ開戦を煽ろうとする国民政府に対する不満を抱き続けていたのである。1941年の末モスクワへの報告でパニューシキンは、「蔣介石はあらゆる手段をもって、我々（ソ連）に対する日本の攻撃を挑発しようとしている。こうした計画において、彼の機関はあらゆる方面で活動を行って

る」と記している²⁵。

日本軍によるシンガポール陥落から間もない1942年2月17日、彼は再び白崇禧と日本の対ソ参戦可能性について議論を行った。白崇禧の見立てでは、日本はドイツとの共同行動において、何よりも世界大戦全体の帰趨を自国にとって有利なものにし、その後中国を鎮圧しようとするというものであった。したがって、今年1月に締結された枢軸国の軍事協定はほぼ確実に、ドイツ軍の春季攻勢に呼応した日本の対ソ攻撃を焦点に当てたものだということであった。これに対してパニューシキンは、日本は蘭印を完全に占領するまではソ連に攻撃をしかけてくることは考えられないと反論した。会談の終盤で白崇禧は、日本の対ソ攻撃は東部戦線におけるドイツ軍の春季攻勢に呼応して今年の春に行われるという見解を繰り返し、パニューシキンは日本の対ソ参戦可能性は排除されるものではないとしながらも、南方作戦中は日本がソ連に対して軍事行動を起こすことはないであろうと考えたのであった²⁶。

ソ連を日本との戦争に突き込ませようとする国民政府側の働きかけは、その後も続けられた。1942年10月16日にパニューシキンからモロトフ外務人民委員へ宛てられた報告書には次のように記されている。すなわち、中国はソ連を日本との戦争に引きずり込もうと積極的な政策を行っており、日本に対する国民革命軍のいわゆる「反抗」という任務を容易にすると考えている。要するに、日本をソ連、英国、米国とで完全に包囲し、その上で戦争の全ての重荷をソ連に背負わせることを期待しているということである。

パニューシキンの観察によれば、中国側は1942年8月に日本がソ連に対して攻撃することを待ち望んでいた。この間日本は中国から軍隊を抽出し、満洲へ移送していた。ソ連大使館に入ってくる非公式な情報は、日本によって準備されている対ソ攻撃について伝えており、中国人達は日ソ戦争の開始を楽しみに待っていたということである²⁷。

『ロシア対外諜報史概説』によると何応欽や周恩来は、ドイツ軍がヴォルガ河に到達しつつある1942年7月が日本による対ソ参戦の最良の機会と認識していることが記されている²⁸。中国側の認識では、日本の対ソ軍事行動は東部戦線におけるドイツの戦況に呼応して行われるものとされていたが、こうした認識はソ連側も同様であった。したがって、日本の対ソ参戦可能性に関する中国側の指摘は、必ずしも根拠のない流言と切り捨てることはできなかったのである。

もっとも、独ソ開戦以来、日本とドイツの陸軍統帥部が共同でソ連を対象とした軍事作戦について議論したことは一度としてなかった。日本の陸軍参謀本部作戦課においては、日本の対ソ参戦はドイツの軍事行動とは関係なく「自主的に」行われるべきであると考えられていた。その上ドイツでは、日本の軍事力は英米両国を牽制するために必要であるとするヒトラーと、日本は早急に対ソ参戦すべきであるとするリッベントロップ外相の間に軍事路線の違いがあった²⁹が、この点はドイツの大島浩大使や日本の陸海軍はもちろんのこと、ソ連側も把握していなかったようである。

国民党中央委員会の秘密司令を重慶のソ連諜報拠点が入手したところによると、1943年に至ってもなお、蒋介石が日ソ戦争の到来を望んでいたことが分かる。その秘密司令には以下のように記されていた。「現在の外交関係を考慮すると、我々はソ連に対する愛着と、ソ連が侵略を受けていることに対する同情をポスターに掲示し、ソ連の持てる力の全てを戦争に費やすようにけしかける必要がある。日ソ関係については、日本に対する反撃を行うための好機が到来するまでは、中国が息継ぎをするためにソ連を日本との戦争に追いやる必要があると考える³⁰」。

『ソ連対外政策文書集』では日本の対ソ攻撃、あるいはソ連の対日参戦に関する中国側の煽情的

な報道は、中国駐在ソ連大使館から蒋介石への抗議の報告があった後によりややく終息したと記されている³¹。この報告がなされた具体的な日時については不明だが、日本の対ソ参戦可能性が急速に遠のいたとソ連側が判断したのは、まさに 1943 年 2 月に入ってからだと推察される。

ソ連にとって決定的だったのは、①1943 年 2 月 2 日にスターリングラード攻防戦がドイツ軍の敗北という形で終結したこと、②1943 年以降の日本の対ソ政策は前年決定されたもの、すなわち「南方における軍事作戦が継続している間、日本は対ソ攻撃を行わない」ということを機密電報の傍受・解読を通じて知ったことであろう。またこの時期の太平洋方面における戦況悪化から、対ソ戦においてドイツから軍事支援を要請されたとしても日本はそれに応じられる状態にはなかった³²。この頃からソ連は日本の軍事的脅威から解き放たれ、「防勢」から「攻勢」に転じることが可能もつとも『ロシア対外諜報史概説』では、中国におけるソ連の諜報活動拠点にとって、日本の対ソ攻撃の脅威について追跡調査を行うという業務は、1943 年半ばクルスクにおいてドイツ軍部隊が壊滅するまでアジェンダから外されることはなかったと記されている。日本が対ソ攻撃を行う余裕はないという情報がモスクワと重慶の間で共有されていなかったのか、関東軍の駐屯する満洲国と地理的に近接している中国で勤務しているソ連大使館員たちにとって、日本の軍事的脅威はモスクワにいる指導部の人々より強く感じられていたのか、様々な理由が考えられるが、重慶のソ連諜報機関が日本の対ソ動向について特に警戒していた様子がうかがえる。

2. 中華民国駐在武官時代のヴァシリー・チュイコフの活動

ヴァシリー・チュイコフに関しては、1942 年 6 月末から翌年 2 月初頭にかけて行われたスターリングラード攻防戦においてソ連の第 62 軍司令官を務め、ドイツ軍を撃退したのち各地で幾多の戦果をあげ、最終的にはベルリンに進軍し終戦を迎えたことが有名であるが、1940 年 12 月から 1942 年 3 月にかけて国民革命軍の軍事顧問として中華民国のソ連大使館に勤務し、主に日本を対象とした諜報活動にも従事したことに関してはあまり知られていない。この時期チュイコフがどのような活動に従事したのかについては、戦後彼が著した回顧録『中国における任務³³』に具体的に記されており、以下では同書に基づきチュイコフが行った対日諜報活動と情勢認識について述べる。

重慶に経つ前の 1940 年秋、チュイコフは国防人民委員のセミョーン・ティモシェンコに呼ばれた。ティモシェンコは共産党中央委員会における会議の席上、チュイコフを中国へ派遣する必要性を感じたという。ティモシェンコは彼に対して、ソ連政府は独ソ不可侵条約を信用しておらず、あらゆる資料からヒトラーがソ連への攻撃を準備していると述べた。ティモシェンコによれば、ソ連政府と国防人民委員部は、ドイツは一国だけでソ連に対して攻撃を行うことはないとの判断であり、日本の立場について特に関心を抱いているとのことであった³⁴。

ティモシェンコは日本が中国の戦場で拘束されている現状について説明し、以下のような情勢判断を行った。すなわち、日本の軍国主義者たちは蒋介石の国民政府に対する勝利を 1941 年に達成するために、あるいは和平交渉へ移行するために全力を注ぎようとしている、彼らは、ヒトラーがソ連を攻撃するまでに、自らの手を自由にしておく必要がある、すなわち、東部における自分達の問題を解決するために、全ての準備をソ連との大戦争に向ける必要があると考えているということである。そしてソ連の課題は、中国が日本の侵略を撃退するのを助けることであり、1941 年を日中戦争における危機的な年とみなし、中国の状況をよく理解し、国民革命軍の真の実力を分析すること、

軍事顧問団長として国民革命軍の活動を活発化させるという任務をチュイコフに課した³⁵。

1926年にフルンゼ名称軍事アカデミーの東洋学部を卒業後、外交伝書使の肩書で中国各地に滞在し、1928年に中国駐在武官を務め、そして特別赤旗極東軍参謀長時代の1929年には中ソ紛争にも参加するなど、中国での経験が豊富だったチュイコフを再び中国に派遣することは、当時のソ連指導部にとって適切な判断であったといえよう。

『中国における任務』によれば、スターリンはクレムリンでチュイコフに次のように述べた。すなわち、中国におけるチュイコフの任務は蒋介石と国民革命軍の将軍たちを援助するだけでなく、日本に対する勝利への確信を持たせることであり、侵略者である日本との和解や合意に向かわせてはならない、全中国人民の力を結束させて対日戦を行わせることによってはじめて、ソ連は二正面での戦いを回避することができるということであった³⁶。

1940年12月半ばにチュイコフは重慶に到着、そこでパニューシキン大使と初めて会った。

1941年初め、蒋介石の国民革命軍は共産党の新四軍に攻撃をしかけ、国共関係が先鋭化した。ソ連側としては新四軍に同情的であったが、こうした態度を表明すると国民政府との関係が悪化する恐れがあったため、チュイコフとしては、共産党に対する侵略的な行動は、ソ連からの国民政府に対する軍事援助に悪影響を及ぼすことになることになると蒋介石にほめかすことしかできなかった³⁷。

そして1941年の夏に重慶のソ連大使館が抱えていた最大の課題は、日本の軍事行動が南方、北方のいずれに向かうかを判断することであった。パニューシキンとチュイコフはモスクワから、現時点で日本の行動はどちらに向かうのか明らかにせよとの指示を受け取った。すなわち、ドイツのソ連攻撃直後に日本がソ連に対して参戦する可能性はないかということである。チュイコフ自身は、日本は戦略資源の乏しさから、日本はソ連ではなく、最初は南方に向かうと思った（傍点筆者）と回想している³⁸。

また、この時期のソ連は、ドイツの対ソ攻撃を利用して蒋介石が日本と妥協し、中国共産党を排除し、共産党軍を根絶するのではないかという懸念があった。実際チュイコフの元には、蒋介石と白崇禧将軍の間でそのような議論がなされたとの情報が届いたという。チュイコフ自身は、そうした可能性があり得るのは、米英二国がドイツと協定を結び、ドイツの対ソ戦を支援するような場合に限り得ると考えた。すなわち、極東の場合だと、米英二国が日本と協定を結び、日本に対ソ攻撃をけしかけるといような場合である。蒋介石はチュイコフを通じて、ソ連政府に対日開戦するよう要求し、彼の側近たちは誰一人としてそうした要求は行わなかったとチュイコフは回想している³⁹が、これは事実と異なる。既にみてきたように、国民革命軍の指導者たちがパニューシキン大使に対して日本の対ソ参戦可能性をしきりに訴え、ソ連を日本との戦争に突き込ませようとしたことは明らかである。

チュイコフは国民政府側による日ソ開戦可能性に関する議論が根拠薄弱であると考えていたようである。また国民政府側にも、日本の対ソ参戦をめぐる議論が分かれていたようである。チュイコフと親交のある国民革命軍の海軍軍人の分析によれば、日本は中国の戦場にはまり込んでいるため、南方における戦略資源を奪取できていない、資源がなければ日本は中国よりも強大な敵（ソ連一筆者）との戦争に備えることはできないということであった。そして、日本の対ソ攻撃の可能性は排除しないが、それはドイツがモスクワか、たとえばウラルのような他の産業地域を占領したときだけであり、ソ連がそこまで弱体化したなら、日本にとってそれほど大きな力も物資も、ソ連と戦うのに必要ではなくなるというのが海軍軍人の見解であった⁴⁰。

先述した通り、戦略物資を獲得する観点から日本は、最初は南方に進出するというのがチュイコフの考えであったため、この海軍軍人の見解は彼の立場と合致するものであり、戦況も実際そのように推移していた。それにもかかわらず国民政府側は、何応欽将軍が出席している軍事会議の場でも日本の対ソ攻撃が迫っているとの偽情報を繰り返したため、ある時チュイコフは、自分達を通じてソ連の軍事指導部を混乱させるような試みは無駄であると不満を表明した⁴¹。パニューシキンとチュイコフの両者が国民政府側の偽情報に翻弄され、日本の対ソ動向をめぐる中国における諜報活動が容易ではなかったことが分かる。

3. 蔣介石の軍事顧問ヴァルター・シュテンネスの活動

ナチス突撃隊の指導者として活動しながらもヒトラーとの路線の違いから対立、国外脱出後は蔣介石の軍事顧問の一人となったヴァルター・シュテンネスが、ソ連の NKVD の協力者として中国におけるソ連の対外諜報活動に深く関与していたことが、近年明らかになった。

シュテンネスは 1931 年 4 月にナチ党中央に対して反乱を起こし、一時収監されるも、ヘルマン・ゲーリングの手によって救出され、1933 年にヒトラーが政権を獲得すると同年末に友人の協力によって中華民国に亡命し、蔣介石の国民政府の軍事顧問および彼の護衛隊長として働くようになり、1938 年にドイツの軍事顧問団が本国に帰還しても、彼はそのまま中華民国に残留したのであった。

『ロシア対外諜報史概説』によると、シュテンネスとソ連との関係は 1939 年から始まった。同年 1 月上海駐在の NKVD 諜報員であるニコライ・ティシェンコは、蔣介石のドイツ人軍事顧問の一人である「ゲンリフ」(暗号名)と会う。「ゲンリフ」によると、ドイツ人顧問のなかで「勇気」「目的の明確さ」という点でシュテンネスを自身の護衛隊長に抜擢したという。更にシュテンネスがヒトラーと敵対関係にあることを「ゲンリフ」から知らされたティシェンコは、「ゲンリフ」との会談の様様をモスクワに送っており、シュテンネスと連絡をとることの妥当性について意見具申を行った。ティシェンコの電報はモスクワで大きな関心をもって受け止められ、NKVD 内でシュテンネスの人物調査が開始された⁴²。

そして、モスクワのパーヴェル・フィーチン NKVD 対外諜報課長は、シュテンネスと直接連絡をとること、もし彼がソ連へ行きたがっているのであれば必要な協力をするよう、ティシェンコに指示した。

シュテンネスの目的は、ヒトラーを打倒することだけではなく、その後ドイツ、ソ連、中国の間に経済発展を目的とした何らかの同盟を締結することであった。また彼の構想では、ヒトラーが新たな戦争を開始した場合、反ヒトラーのドイツ人亡命者達が新しいドイツ政府を樹立し、国際的に承認される必要があった。シュテンネスによると、彼は米国、英国、そして仏国の諜報部の代表達と連絡をとっており、ソ連との情報共有も行うが、情報源を明かすことはできないとの条件をつけた。この時の会談の様子がモスクワに送られ、以後シュテンネスはソ連側から「友人」の暗号名で呼ばれるようになったが、その後シュテンネスとソ連の連絡は一時断絶されてしまう⁴³。『ロシア対外諜報史概説』では両者の連絡が途絶えた理由を「原因不明」としているが、シュテンネスが蔣介石の軍事顧問と護衛隊長のほか、国民政府の諜報業務に忙殺されていた可能性が指摘できる。

中国で蔣介石の護衛隊長となったシュテンネスは、蔣介石に欧州情勢に関する情報報告の責任者の任務も与えられた。1937 年 7 月に日中戦争が始まると、蔣介石は日本に関する必要な情報収集・

分析もシュテンネスに要請するようになった。このためシュテンネスは、ハノイやハイフォンにある自身の諜報拠点を利用するほか、当時の香港市長とも情報関係の業務提携を行い、定期的に香港に出張していたという。

1940年4月にシュテンネスは重慶における業務（蒋介石の個人的な護衛のことか―筆者）を、中国に残留し続けていたドイツ人軍事顧問のシュテルリッツに引き継ぎ、諜報活動に専念するために上海に移った。上海では国民党政府の現地の諜報網を指導し、重要な情報を重慶の本部に送るための無線通信局の設置に協力した。シュテンネスは蒋介石に対して個人的に情報報告を行うために、定期的に重慶を訪れたという。

重慶で活動するソ連の諜報員たちにシュテンネスが伝えたところによれば、ドイツも上海に自前の諜報拠点を開設することを決定したという（ドイツ外務省上海情報総局、上海におけるゲシュタポの諜報網、ドイツ国防軍防諜部の「中国駐在戦時特務機関（Kriegsorganisation China, 略称：KO-China）」のことを指していると考えられる―筆者）。ソ連側の対外諜報活動の現地代表者たちにシュテンネスが強調したのは、自分はアジアだけでなく、ドイツ本国にも情報提供者がおり、彼らから得られた情報を無償でソ連側と共有するということであった⁴⁴。

その後1940年11月25日、東京で諜報活動を行っていたNKVDのグリゴリー・ドルビン（駐日ソ連大使館一等書記官）のもとに、シュテンネスを搜索し、彼との連絡を復活させるようにモスクワのラヴレンチー・ベリヤから指示が届いた。同年12月シュテンネスと会ったドルビンは、シュテンネスがモスクワを訪問したがつていることを本国に伝えた。

1941年に入り、シュテンネスの訪ソを実現させるためにヴァシリー・ザルービンがNKVD外国課の上海支局長代理として派遣された。ザルービンとの会談でシュテンネスは、ドイツが現在の欧州における戦争をどうしても解決できない場合（対英屈服あるいは講和を実現できないのであれば―筆者）、ヒトラーは必ずソ連に対して攻撃を行うと述べた。また、日本とドイツは防共協定の調印国であり、両者は一致してソ連に戦争を仕掛けようとしているのだというザルービンの見解に対して、シュテンネスは、日本とドイツの関係は万事上手くいっているのとは程遠く、ヒトラーは、より慎重に行動ができるように日本に圧力をかける必要があると述べた。そして、シュテンネスはベルリンから到着した有力な官僚の談話として、ドイツの対ソ攻撃が5月末に想定されていると伝えた⁴⁵。

1941年6月9日にザルービンが「シラー」の暗号名でモスクワに送った電報には、シュテンネスとの会談内容が記されている。それによると、ベルリンから到着した大物（「シラー」の仮定ではドイツ外務省職員のプットカマーとカッコ付で記載されている。ドイツ外務省上海情報局長のイエスコ・フォン・プットカマーのことか―筆者）はシュテンネスに、ドイツによる対ソ攻撃は軍事的にも経済的にも準備が完了しており、今年5月に攻撃が予想されると伝えたのだという。対ソ攻撃の要因は両国間の経済的な軋轢によるものであり、対英戦が秋までに終わらなければ、ドイツは石炭と鉄を確保するためにウクライナとドンバスを占領するつもりであり、秋までに対英戦の決着がつけば、武力衝突に訴えることなくソ連との取引が行われる可能性があるとのことであった。ドイツのあらゆる一般大衆、海軍、そして上流階級の人々は、対ソ戦は勝利の行進曲に終わり、長くとも三か月で終結するものと考えているという。ソ連が三か月で敗北するという絶対的な確信の理由は何かという質問に対してシュテンネスは、彼自身はこうした見解には全く与していないとのことであった。シュテンネスは、ドイツ本国の対ソ戦における絶対的な勝利の確信が何を根拠にしている

のか、ドイツ人は対ソ戦についてどのような情報を有しているのか分からないが、ソ連の国内状況と赤軍の状態がドイツ人にとって勝利の確信における重要な要素となっていると述べた⁴⁶。

1940 年秋以降、ドイツのソ連侵攻可能性に関する情報が各国の諜報機関からモスクワに打電されていたが、これもその一つである。この電報を読む限り、ドイツ外務省内に反ヒトラー派の人物がおり、ソ連侵攻に関する機密情報をシュテンネスに伝えるために中国を訪問したことが分かる。ただし、ドイツ国内とシュテンネスとの情報網がどれほどの規模であったかは判然とせず、また本電報はモスクワの関心を惹かなかった模様である。

ザルービンが開戦直前の 6 月 20 日に再び内容をモスクワに打電した。曰く、「情報提供者は、精密な資料に基づいて、ヒトラーは完全に対ソ戦の準備を完了したとはっきり確認している。彼はこのことに関して我々に警告しており、我々がしかるべき結論を引き出す必要があると考えている⁴⁷」。

しかし、ザルービンのモスクワ宛て電報を含む独ソ開戦情報を伝える電報は、参謀総長のジューコフと国防人民委員のティモシェンコの関心は惹いても、肝心のスターリンの政策決定に大なる影響を及ぼすことはなかった。開戦当日の深夜、ジューコフとティモシェンコの連名でドイツ軍による奇襲攻撃に備えるための命令が国境の軍管区宛てに発せられるが、時既に遅く、開戦当初ソ連軍は甚大な被害を生むことになったのである。

上海のシュテンネスに課せられた次なる課題は、重慶のパニューシキンやチュイコフと同様、独ソ開戦後の日本の動向について情報を得ることであったが、この時シュテンネスがモスクワに送った電報類については未だ公開されていない。ロシア国防省が 2013 年に公刊した『大祖国戦争 1941-1945 年』第 6 巻には、1941 年には日本はソ連を攻撃しないという貴重な情報をシュテンネスがもたらしたと書かれているが、典拠も電報の原文も記載されていない⁴⁸。また 1942 年以降のシュテンネスの諜報活動についても不明な点が多く、NKVD の一部の幹部には信用されたのかもしれないが、スターリンを首班とするソ連の指導的な人々にとって重要な情報源であったとは必ずしも言い切れないのではないかと推察される。こうした点では、シュテンネスもゾルゲと同様、諜報員としては過大評価されていたのが実情と思われる。

結び

ソ連にとって対日情報を収集するための諜報活動拠点としては東京と同様に上海や重慶重要であったが、彼らにとって活動を困難にさせたのは、対日戦争の負担を減らしたためにソ連の参戦を望む国民政府がソ連大使館員らに意図的に偽情報を流し、日ソ戦を煽動するような報道を大々的に行っていることであった。

元々ソ連にとって日本は極東における最大の仮想敵国であったが、彼らは日独軍事関係を過大に評価しており、日本の対ソ軍事動向はドイツ側の動きと呼応するものだという思い込みがあった。こうした思い込みは中国駐在の大使館員たちに限られたことではなく、モスクワで指導的立場にある人々にも見られる現象であったが、連日にわたって日本の対ソ参戦可能性に関する情報に触れる中国駐在の諜報員たちにとっては、日本の軍事的脅威は現実のものより遥かに大きく受け止められたと推察される。ロシア側の公刊資料などを見る限り、多少時期の相違は見られるものの、1943 年の夏までには、日本はソ連を攻撃するつもりはないという信憑性の高い情報をソ連側は獲得したと記されている。

ソ連側のこうした情勢認識に大きな影響を与えたのが、1943年2月に日本政府が決定した「南方における軍事作戦が継続している間、日本は対ソ攻撃を行わない」という情報を傍受したこと、スターリングラードおよびクルスクにおいてドイツに対して軍事的勝利を得たこと、更に南方における日本の戦況悪化に関する情報を獲得したことであろう。モスクワの指導部はこれらを総合的に判断した結果、日本の対ソ軍事脅威は過ぎ去り、逆に日本に対して外交的にも軍事的にも「攻勢」に転じる用意ができたのである。

¹ ロシアでは国防省や対外情報庁といった官庁による公開資料集のなかでも、日本の大陸侵略政策は「田中上奏文」に基づく計画であったとの記述がなされている。このテーマを扱った最近の論考としては、たとえば以下を参照。河西陽平「ロシアの対日歴史認識問題：情報戦の一手段として」（中曽根平和研究所コメントリー、2024年5月14日）<https://npi.or.jp/research/2024/05/14143217.html>（2025年1月14日閲覧）

² Л. И. Галлямов, В. Л. Ларин, История Дальнего Востока России Том 3. Книга 2. Дальний Восток России В Эпоху Советской Модернизации: 1922-начало 1941 года (Владивосток, 2018), стр. 603.

³ 近年、機密解除されたゾルゲ事件関連資料を用いた文献が多数公開されているが、最新のものとしては以下を参照。名越建郎『ゾルゲ事件 80年目の真実』（文春新書、2024年）。

⁴ パニユーシキンは1905年8月2日サマーラで労働者の家庭に生まれ、1920年に赤軍に志願、内戦で戦闘を経験している。1921年3月に騎兵課程に入り、レニングラードの労農赤軍騎兵学校に学んだ。卒業後は極東の国境部隊に勤務することになるが、これがアジアとの最初のつながりになる。1927年9月から34年9月まで国境警備隊司令官、合同国家政治保安部（OGPU）第59沿海州騎兵部隊の国境地区衛戍司令官として極東に勤務。1935年5月フルンゼ名称労農赤軍軍事アカデミーに入学し、1938年に修了するが、既に1934年から内務人民委員部（NKVD）に勤務しており、38年12月には第1局第3特殊課長になっている。ロシア対外情報庁（SVR）のホームページによる。<http://svr.gov.ru/history/person/pan.htm>（2025年1月14日閲覧）

⁵ В. И. Трубников, История российской внешней разведки: Очерки: В 6 т. Том 4. 1941-1945 годы. (Москва, 2014), стр. 356.

⁶ Там же, стр. 359-360.

⁷ Министерство иностранных дел российской федерации, Документы Внешней политики Том 23 Кн. 1. 1 Января-31 Октября 1940г. (Москва, 1995), стр. 112-113.

⁸ Там же, стр. 447.

⁹ Там же, стр. 720-721.

¹⁰ Там же, стр. 722.

¹¹ Министерство иностранных дел российской федерации, Документы внешней политики Том 23 Кн. 2 (Часть 1) 1 Ноября 1940г.- 1 Марта 1941г. (Москва, 1998), стр. 149.

¹² Министерство иностранных дел российской федерации, Документы внешней политики Том 23 Кн. 2 (Часть 2) 2 Марта 1941г.- 22 Июня 1941г. (Москва, 1998), стр. 541-542.

¹³ Там же, стр. 588-589.

¹⁴ В. И. Трубников, История российской внешней разведки: Очерки: В 6 т. Том 4. 1941-1945 годы., стр. 361.

¹⁵ 独ソ開戦情報で最も正確に近い情報をモスクワに送ったのは、赤軍参謀本部情報局の協力者であったモスクワのドイツ大使館に勤務する商務担当参事官ゲルハルト・ケーゲルと推察される。ケーゲルが開戦直前に送った電報は1941年6月21日19時であり、開戦時刻を「間もなく」と記している。В. Гаврилов, Военная разведка информирует. Документы Разведуправления Красной Армии. Январь 1939 – июнь 1941 г. Россия. XX век. Документы. (Москва, 2008), стр. 713.

¹⁶ 河西陽平『スターリンの極東戦略 1941-1950 インテリジェンスと安全保障認識』（慶應義塾大学出版会、2023年）31頁。

¹⁷ 同上。

¹⁸ Министерство иностранных дел российской федерации, Документы внешней политики Том 24. 22 Июня 1941г.- 1 Января 1942г. (Москва, 2000), стр. 18-19.

¹⁹ Там же, стр. 34-35.

²⁰ Там же, стр. 50-51.

²¹ Там же, стр. 112-113.

²² Там же, стр. 158.

²³ Русско-Китайские Отношения в XX Веке Документы и Материалы Том. IV: Советско-китайские отношения.

1937-1945 гг. Кн. 1: 1937-1944 гг. (Москва, 2000), стр. 663-664.

²⁴ 河西陽平『スターリンの極東戦略 1941-1950』46-48 頁。

²⁵ В. И. Трубников, История российской внешней разведки: Очерки: В 6 т. Том 4. 1941-1945 годы., стр. 361.

²⁶ Советско-китайские отношения. 1937-1945 гг. Кн. 1: 1937-1944 гг., стр. 683-684.

²⁷ Министерство иностранных дел российской федерации, Документы внешней политики СССР Том 25. Кн 2. 1 Июля- 30 Декабря 1942г. (Тула, 2010), стр. 276-277.

²⁸ В. И. Трубников, История российской внешней разведки: Очерки: В 6 т. Том 4. 1941-1945 годы., стр. 362.

²⁹ 河西陽平『スターリンの極東戦略 1941-1950』23-24 頁。

³⁰ В. И. Трубников, История российской внешней разведки: Очерки: В 6 т. Том 4. 1941-1945 годы., стр. 361.

³¹ Министерство иностранных дел российской федерации, Документы внешней политики СССР Том 25. Кн 2. 1 Июля- 30 Декабря 1942г. (Тула, 2010), стр. 279.

³² 河西陽平『スターリンの極東戦略 1941-1950』112-114 頁。

³³ В. И. Чйков, Миссия в Китае (Москва, 1983).

³⁴ Там же, стр. 48.

³⁵ Там же, стр. 50.

³⁶ Там же, стр. 53.

³⁷ Там же, стр. 117.

³⁸ Там же, стр. 174.

³⁹ Там же, стр. 188.

⁴⁰ Там же, стр. 203.

⁴¹ Там же, стр. 227.

⁴² Е. М. Примаков, История российской внешней разведки: Очерки: В 6 т. Том 3. 1933-1941 годы. (Москва, 2014), стр. 393.

⁴³ Там же, стр. 396.

⁴⁴ Игорь Игнатченко, «Немецкий "Друг" Советского Союза,» Независимое Военное Обозрение, 17 февраля 2012. https://nvo.ng.ru/spforces/2012-02-17/15_drug.html (2025 年 1 月 24 日閲覧)

⁴⁵ Е. М. Примаков, История российской внешней разведки: Очерки: В 6 т. Том 3. 1933-1941 годы., стр. 398.

⁴⁶ Россия. XX ВЕК Документы: 1941 Год. в 2-х книгах Книга Первая (Москва, 1998), стр. 336-337.

⁴⁷ В. И. Трубников, История российской внешней разведки: Очерки: В 6 т. Том 4. 1941-1945 годы., стр. 214.

⁴⁸ Министерство Обороны Российской Федерации, Великая Отечественная Война 1941-1945 годов. В 12 т. Т.6. Тайная война. Разведка и контрразведка в годы Великой Отечественной Войны. (Москва, 2013), стр. 206.